
Narrative of sorcery～魔法世紀の物語～

零光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N a r r a t i v e o f s o r c e r y 魔法世紀の物語

【Nコード】

N 2 8 9 6 B

【作者名】

零光

【あらすじ】

学校で魔法や召喚術，そんな事を教えているような時代。学校で最低ランクの魔法すらまともに使えないロスはある日同級生のレイとヘルとで一緒に下校していた。だがその途中に声が聞こえて……。

1..突風

学校では武術や魔術，召喚術。

そんな授業が平然と行なわれる様な時代に時はさかのぼっていた。

「ストーム！」

風すら起きねえ。

俺はもう8年生なのに未だに初期魔法すら使えず，召喚なんか虫すら出なく，おまけに運動神経まるで無しの17歳。

ちなみにこの学校は11年制で，あと就学期間は3年。

俺なんかがこの8年間，留年しなかったのには何か裏で先生が企んでるんじゃないかと思うほどの成績。

大体こんな魔道書で竜巻が起きる原理ってのは：

「先生！ロスがまた物思いにふけてますよ！」

また小うるさい奴が余計なことを。

この余計な小娘はレイ。

主に魔術専門と言ったところで，8年間こいつの余計な先生へのチクリ攻撃によって何回怒られた事か。

しかも魔術だけは遥かに凄い。だってどこに要注目。

ちなみにロスが俺の名前。実際はロスベルトなんだけど，めんどくさいって事で省略。

俺もフルネームで呼ばれたとは思わな：

「おい！ロス！女の想像か？お前も想像力だけは立派に育ってんじやねえの？」

またうるさい2号が。

こいつはヘル。悔しいが万能型。更に美形。

まあ召喚術が使えないところを非難してやりたいが、俺はもっぱら全部使用不可みたいなのなので反論出来ない。

だれだ。こんな魔法なんか作り出した過去の偉人は。

と言った所でその偉人の名前は学校に入学した時に強制的に覚えさせられるんだけど。

アーガス。魔法，召喚獣の原理を解明し，その使用法等を書物に記した偉大な人。

何百年も前に城に新しい召喚獣の可能性を探しに行ってから行方不明らしいけどね。

ボコッ。

頭に衝撃が襲った。

これはきつと先生の魔道書の角チョップだな。

「あなたはこの8年間でまだストーム。竜巻の初期魔法すら使えないのですか？」

このアル先生は物理魔法，補助魔法，特殊魔法，さらには召喚までこなせる魔術のスペシャリスト。

確かに俺って8年間進歩無いよな。

9歳の俺は魔道書抱えて歩いてたけど，全く魔法なんか出なかったし，周りの奴らは11歳くらいでそよ風くらいは出てたし。

「レイを御覧なさい。もうランク2も使えるんですよ。」

見るとレイは どうだ と言わんばかりのポーズだ。
そこで胸を張るな。情けないかもしれないがお前に腕相撲ならまだ勝てるぞ。

そもそもなんでこんな風に魔法を学んでいるのかと言うと、アーガスがこんな余計なものを開発してくれたおかげで魔法や召喚術を悪用する奴が当然出てくるのだ。

その為の防護術みたいなものかな？

俺は防御魔法だけは少し出来るぞ。ランク1だけど。

各魔法にはランクがあつて1が最低、10が最高。

ランク10になると威力はもう言葉じゃ言えない位凄い。

使える人は見たこと無いけど。

アル先生ですらランク7が最高らしい。

武術は戦闘用といった感じで魔法とかは関係が深くない。

ただ魔法で威力を増したり、サポートして戦うのが一般だが。

召喚術は一番難しく、まずは世界各地に潜む召喚獣を倒さなければならぬ。

倒した後は契約して終わり。

卒業した時、あるいは実績が認められたときに各自妖精の召喚獣を一匹貰える。

レイはその実績が認められたタイプでもう召喚も使える。
クラスではナンバーワンの魔術力だからな。

「はい。じゃあ今日の演習はここまで。」

結局今日も魔法使えなかったなあ…。

勉強不足か？

「ロスったらしい加減ストームくらい覚えなよっ。」

レイは一回転して俺の肩を叩く。
こいつは一回転したりステップを踏んだり無駄な動きが多いな。

「風も起きなかったよな。こりゃまいった。」

ヘルは可哀想な物を見る目つきで俺を見ている。
俺は捨てられている子犬同様か？

「まあ明日は学校休みなんだし、ゆっくりしよお！…ってわけで
今日夕食食べに行こうね。決定っ！」

どんなわけだよ。
とか言いつつ一緒に行動している俺ら3人は何だかんだで仲がいい
のかもな。

そうして3人で歩いていると突然突風が吹いた。
…？何か妙だ。
何故か嫌な予感がある。他の二人は何も気付いていないようだが、
どうしても胸騒ぎがする。

そして突然頭の中で響くように声がした。

「早く校庭へ…3人で。」

…おいおい…疲れか？風邪でもひいたんだろうか。
念のため二人にも確認する。

「今校庭へ3人で行けって聞こえた…かな？」

「…はあ？」

「…ロス？何のこと？」

やっぱり聞こえてないんだろう。だけどどうしてもこのまま放っておけない。

「二人とも一緒に校庭に来て！早く！」

俺は学校に走った。

訳も分からず後ろから二人もついてくる。

レイは魔法で移動しているようですぐ俺の横に移動してきた。

「どうしたの？いきなり言うから何のことか全くサッパリ理解できないよ？」

「いいから。」

俺はそれだけ行って走り続けた。
自分たちの見慣れた学校へ。

2..声

校庭に着くとそこはすでに人気もなく、教員も全員帰ってしまった後の静けさだった。

「おいおい：一体何なんだよ？校庭に魔道書でも置き去りにしたか？」

ヘルは移動魔法は使えなかったようで息を切らしている。
だけど俺にはわかった。
やっぱり様子がおかしい。

「はい？ええっ？ちよっ：ふぎゃあ！」

レイが意味不明な声を発して指差した先には骸骨の戦士と言えば一番説明がつくかのような物が大量にいた。

おいおい：確かあんな姿のやつを魔物とか言って超高度の闇魔法だとか授業で言ってた様な：

「ライトッ！」

レイが骸骨軍団を追い払おうと魔術を唱えている。ヘルは華麗に回し蹴りで骸骨を倒していた。

：俺はどうか防御魔法で逃げているだけ。情けないね。自分が。それにしてもなんでまたいきなりこんな奴らが。しかもさっきの声は何だったんだよ？

更に骸骨軍団は数が減らず、むしろ増えているようにも感じた。

「きりないよお。」

レイが倒した骸骨は地面へと溶け込んでいるし、ヘルが倒した骸骨も同じだった。

俺はここでもさっきと同じ嫌な感じがした。

何か自分への危険が迫っているような。

まさにその時、地面からでっかい蜘蛛がすり抜ける様に出てきた。

「…おいおい…」

「…こりゃあ大惨事…」

「蜘蛛嫌 ああああ！！！！」

三人が啞然としているとその蜘蛛は糸を吐き出しあっという間に俺ら3人を捕らえてしまった。

こんな糸で縛り付けられては何も出来ないし身動きすら取れない。

「ちょ…ロス！くつつき過ぎ！！」

そう言われましても…。

蜘蛛はそのまま攻撃してこないで黙っていた。

すると突如周りの風景が歪み、消え、そして突然草原のような場所に俺たちは移動した。

「やれやれ。間に合いましたか。」

俺たちの方に歩み寄ってきた吟遊詩人のような姿の男が笑みを浮かべている。

「おっ…お前がああ骸骨達を？」

俺が問いかけると両手を上げて微笑みながら

「まさか。私はあなた方をあの異空間から連れ戻したんですよ。あの蜘蛛は私の召喚獣です。テレポーターシヨンの魔法も私が。」

いきなり何を言い出すんだこいつは？

異空間？俺たちが元いた世界が？んなこと言っただけで俺はその世界で17年過ごしてきたんだぞ？

「その通りです。異論ありません。ですがその世界が約15分前に改ざんされました。そしてこちらの世界は差し詰め緊急避難所とも言ったところでしょうか。この世界を作ったのはエリル王女。皆さん知っている通り今は異空間ですが、元の世界の王女です。彼女の魔法力は素晴らしいですからね。世界が改ざんされた1秒後にはこの緊急避難所を作ってしまったました。そしてこちらへの皆さんの輸送は転送魔法、いわゆるテレポーターシヨンが使えるもの全員が力を合わせてやっています。既に90%くらいは輸送済みです。」

俺も含め3人は呆然としている。

いきなりそんなこと言われても困るな。

「それで…その改ざんしたのは誰なんですか？王女でも正体は掴めなかったと言う事でしょうか？」

レイはおどおどと聞いていたがその横のヘルは冷静に

「まず改ざんの魔法なんてランク10…もしくはそれ以上だな。聞いたことも無い。緊急避難所を作る魔法はスぺースだろうからランク10、テレポーターシヨンはランク8…だったかな。って事はあなたもかなり魔術に詳しいんですね。何か他に知りませんか？」

この二人の質問はなんともしつかりした質問だこと。俺なんか頼り

ないなあ。本当に。

「まず改ざんをした相手の正体ですが、恐らくスペースの魔法でさらに別空間へ逃げ込んでいるので分かりません。改ざんの魔法は名称は知りませんがランク10の闇魔法だそうです。もともとこの世で使える人がいるとは思いませんでしたが。ちなみに先ほどの骸骨達を召喚したのも同一人物だと考えていいでしょう。これも闇魔法でランクは5。比較的初級なのであのような低い戦闘能力ですが、もっと上のランクになると、より強力な魔物が出てくるでしょうね。他に知っていることといえば：その改ざんをした相手、まあ敵とでもいいましようか。その敵を倒すために王女が何か手をうとうとしている事くらいですね。詳細まで知りませんが。」

要するに俺たちはここで事が収まるまで待機って事か。

「そういえば：校庭に三人で行けって言ったのもあなたですか？」

確かに俺には聞こえたのだ。

「いえ：？私は何も言ってませんが。それにあなた方が校庭にいたのを発見したときは既に骸骨軍団に囲まれていましたし、そのような言葉をあなたに届けるための魔法はありませんね。確かに聞こえたのですか？」

今まで自分の記憶力は散々疑ったが今回は確信がある。

「そうですか：。なら王女に会ってみるといいかもしれませんね。何か知ってるかもしれませんし。王女のいる台座はここから左に真っ直ぐです。よろしければテレポーテーションで送りますが？」

さすがにお世話になりすぎるのも悪いし、ほかの人たちも救ってもらうために俺たちは歩いて王女のもとへ向かった。

「それではお気をつけて。…あ、よろしければこれをどうぞ。護身用程度にはなりますよ。」

そういつてランク5の水魔法の魔道書を貰った。…誰も使えないよな…ランク5なんて。

「大丈夫です。こちらの世界では各個人の魔力が一定量増します。王女がそこまで配慮してくれたようです。おかげで私も魔法が簡単に使えます。魔法を連発で使うのは私でも疲れます。それではこのくらいで。幸運を祈ります。」

そういうわけで行きなりで何のことかよく分からなかったが三人で王女に会いに行くことにした。

確かに魔法の連発は俺も疲れるな。失敗でも。

俺たち三人は王女のいる場所へ歩み始めた。

3..覚醒

王女のいる場所は特殊な雰囲気で床までもがガラス張りで下は銀河のようになっていた。

そして目の前にいる王女がこの緊急避難所を作り出したのだ。実に素晴らしいね。

王女は椅子に淑やかに座り優しそうな笑みで

「それで私に尋ねたいことというのはなんでしようか？」

なんとも上品さが出ている声や動作で王女だということが実感できる。

俺たちが来るのも質問するのも予想済みのようだ。

俺は先ほどの声の事を王女にそのまま話した。

すると王女は静かに横においてあった魔道書を手に取り

「あなたの言いたい事は全て分かりました。私にもその記憶を見せてもらいますね。」

この人は何でも出来るのだろうか？俺の記憶を見るって…なんか恥ずかしいな。

「なるほど…確かに聞こえていますね。そしてその声は恐らく光魔法で作られた音声でしょう。声から判断すると老人でしょうか…。」

俺の記憶が分かっているかのように話す王女だが間違っている部分が一切無いため否定も出来ない。

「あの…その記憶を見る事が出来る魔法って…とっても凄いですよ
ね？」

レイが俯き加減で尋ねると王女はまたにっこり上品に笑みを浮かべ

「あなたも練習すれば出来るようになりますよ。」

俺はランク1風魔法も出来ないんですが。

そういえばこっちでは魔力もあがるんだったっけな。それも王女が
やったってことはこの人は凄い能力があるんだろう。

「それで、こっちでは魔力が上がると聞いたんですが、実際どれく
らい上がるのですか？」

ヘルが珍しく真面目な顔つきをしながら聞いている。

「人それぞれですがランク4くらいまでは誰でも使えるんじゃない
でしょうか。魔道書が読めないのでは無理ですが。ただ個人差もあ
りますし、己の内に秘めた魔力を特別な方法で一気に開放している
物なのでその人の実力次第です。」

俺も使えるのかな？

早くやってみたい気持ちが少し湧いてきたがここは抑えて…。

…それにしてもいきなりこんな事になるなんて誰が想像出来た物か。

「これから私は我が国の精鋭部隊で事の元凶となっている相手を探
り出し、倒しに行く予定です。その間城の軍のものにここの護衛を
任せ、私は元凶を倒した時点で元の世界に帰れるように努力します。

他にもこの空間そのものにバリアを張ったり、防御姿勢は万全です。」

王女はしっかりと顔でそう言うともた笑みを浮かべて

「最善を尽くします。」

そう言って奥の間へと行ってしまった。

王座から森へ出て、一面の野原が広がる場所まで来た。
結局俺たちが出来るのはただ待つ事で、今は何も出来ない。

「どうせなら魔法の練習でもしようか。」

レイはそういうと先ほどのランク5の魔道書を出し、

「えーっと…スプレッド！」

そう言うのと突如地面から水が噴出しレイが指差した一転に水が一気に放出された。

その地面は水圧でかなりへこんでしまった。

「…すっごーい！！私こんなに威力ある魔法使えたよ！わああ！！」

それはそれは。おめでとう。

適当に応答していたがヘルが突然上空に防御魔法を放った。

「危ないっ!!」

間一髪。上から火の玉が何発も降ってきていた。

何故？どうして？なんで？

疑問符がたくさん浮かんできたが上空を見ればすぐに状況は掴めた。大量の魔物の群れ。あれはワイバーンか？

その大きな翼と姿はまるでドラゴンだ。

「なんでえ〜？確か王女様がバリア張ってるはずなのに。」

レイは地面に座り込みながら呆然と上を見ていたが、立ち上がると

「よおおしっ！スプレッド！」

先ほどのように水柱が魔物めがけて飛んでいった。

その一撃だけで魔物は20匹くらい消滅していた。

こんな威力があるものなのか。

だがそれ以上に上空には魔物がいる。

空が見えない。

このままじゃまずい。

しかし間もなく王女の言った精鋭部隊らしき人たちがどこからともなく表れ、各自の召喚獣や魔法などで魔物を撃退し始めた。

そしてこの空間全体にアナウンスが響いた。

「私です。エリルです。今この避難地全体に魔物が約15億匹発生しています。私のバリアも破られてしまったようです。撃退は我が国の精鋭部隊に任せて皆さんはB-12地区に避難してください。そこに集中結界を張っています。繰り返します…」

その地区まではここからそんなに遠くない。だが見たところ精鋭部

隊といえどもこの数の魔物には苦戦しているようだ。
それに15億という数字の魔物が出現するとは…。

「ロス！早く！」

俺の手を引いたレイは召喚で大きなサーフボードのような姿に変形した召喚獣を出し、そいつに乗ると一気に加速した。

レイの召喚獣は好きな形に姿を変えられる軟体生物のような生き物でスライムとかそんな風に呼ばれている。

こいつは何も喋らないのでなんだかよく分からないがレイに可愛がってもらっているらしい。

羨ましいやら何やら。

無表情に線一本の目と口に半透明の濃い青の体でスライムは進んでいた。

そのスライムは低空飛行で目的の避難地区へ移動していたが、その移動中にまたしても頭の中にあの声が響いた。

「右下…12秒後に右下…」

まただ。これにも従っておくべきなのだろうか。

12秒後…もうすぐ来る…3…2…1…

右下を見ると何やら真っ白な本が落ちていた。

俺がそれを救い上げるとそれは魔道書のようなだった。

「それって…光魔法の魔道書…？」

レイが言うにはそうらしい。

「見た事も無い種類だな。なんでそこにあるって分かったんだ？」

ヘルは不思議そうな顔をしていたがまた声が聞こえた事を言うと、

「お前：何かの力があるんじゃないか？その魔術書だってお前使えるかもしれないぞ？：いや、スマン。それは無いな」

魔術書には1ページ目に呪文が書いてあるだけで他のページは全て白紙だった。

物は試しに上空に魔法を唱えてみた。

「：ライトニングバーストっ！」

唱えた瞬間俺の周りが全て真っ白になったかと思うと上空のワイバーンが全て消滅していった。

：そんなアホな：。

俺を含め全員が啞然とした。

俺が使ったのは光魔法ランク10の魔法だった。

4..本領発揮

結局また頭に響いた声の言う通りに行動した結果がこれだ。

光の魔術書が落ちていてそれを俺が使えた。

しかもランク1も唱えられない俺がいきなりのランク10魔法。

レイもヘルも何で？どうして？の一点張り。

聞きたいのはこっちだって。

避難所に向かっていた俺たちだが魔物はいなくなってしまったので避難所に行く理由も無いんじゃないかと話していると突然スライムが止まった。

「んぎゃ。」

変な声を出してしまったが、顔を上げるとそこには王女がいた。

レイはスライムがすっかり押さえていたので落下しなかったが、俺とヘルは地面に放り出された。

しかし、地面に着く前に地面がウォーターベッドのように変形したため全くの無傷ですんだ。

後に知ったがこれは王女が魔法で作り出してくれたらしい。

「あ、王女様。どうしましたかあ？」

そんな呑気に話すな。レイ。

このエリル王女はこの空間を作った凄い人で…と言うより王女なんだぞ？

「いえ、気にしないでください。私は自分の身分なんか気にしないで頂いて結構です。その方が楽ですし。」

なんていい人だ。美人だし。

「それで：どうしたんでしょうか？」

ヘルが尋ねていたが、俺は質問の内容は少し感じている。

「あの大量の魔物を一瞬で倒したのはあなた方ですよ？我が国精鋭部隊でも200体を一撃で倒すのが精一杯なのに：。使った魔法は光魔法ランク10ライトニングバースト。大賢者インデイスが書き記した太古の書物。」

：9割知らなかったがとりあえず凄いものらしいな。
でも：

「これはまた頭の中に声が聞こえて：それで指示通りにしたらこの魔道書が落ちていて：俺が呪文をただ読んだら：。」

そう言うときレイとヘルもびっくりしていたようだが、王女までもが驚いたような顔をしていた。

「そんな：その呪文は私が腕輪を装備しても発動できません。それにその魔道書がある城は：アーガスが行方不明になった城でも何百年前に捜査がすんでいます。でもその時にその魔道書は無かった。歴史上ではアーガスがその魔道書を使い城の隠された部屋に向かった事になっています。ある分析家の説ではその部屋に今まで発見されていない召喚獣がいると言われています。今現在その城にそのような隠し部屋すら発見されていませんが。」

歴史がチンプンカンプンな俺ときレイは顔を見合わせていたが、ヘルだけ指をこめかみに置き何か考えているようで、

「えっと…少し質問しても良いでしょうか？まず腕輪って言うのは何でしょうか？装備するって言う事は魔力増強のアイテムですか？それと、アーガスが使っていたと言われる書物が何故この緊急避難所に？ここはあなたが作り出した空間ですよね？」

「この腕輪についての質問は簡単です。私が魔力を液体化してそれを闇魔法、光魔法の特殊な合成で作り出す魔力増強アイテムです。ただ何種類もあって一つの種類の魔法を強力にするものや防御魔法を強くするものなど様々です。私が身につけているものは全能力を上昇させるもの。但し上昇値は他の腕輪より低めですが。腕輪は精鋭部隊全員に私が作りました。各個人に合わせて。そしてその魔法書がここにある理由ですが、私が考えられるのはテレポーテーションの魔法でどこから送られた。それぐらいしか…。」

王女と言えども俺とあんまり年齢差無く見えるがこの人はやはり常人の域を超えているような気がした。

そんな腕輪が作れる人なんて始めて聞いたし、言っている事が俺には難しい。

「じゃあ誰かが私たちの味方になってくれてるって事でしょうかね？」

レイはスライムを抱きしめながら首を傾げて聞いている。

でも俺だけにしか聞こえないって言うところが問題だ。

どうせなら全員に聞こえるくらいに助けてくれてもいい気がするが。

「味方…と断定して言いかわからないですが、気になるのはこの魔法書を簡単に使ってしまったあなたです。えっと…ロスさんですね。あなたの記憶の断片から察したところあなたは魔法は不得意だったようですが…。」

そこまで見れたんですか。確かに記憶を一回見られたようだが、どこまで知られてるんだ俺は。

「一つ、導かれた答えはあなたは光魔法の能力が飛びぬけて高く、その反面他の魔力が低いのではないかと思います。と…なると魔物相手にはとても有利になりますね。」

そりゃ学校では光魔法なんてぜんぜん練習しなかったからな。レイは光魔法の実習も選択で他の魔法より数段難しいとか言っていたぞ。

「じゃあロスが防御魔法だけ出来たのもそのおかげなんでしょうかね？ 防御魔法は光魔法と隣接する魔力の影響を受けやすい配置ですもんね？」

レイは魔法には詳しいのでこういう時は自身のある声で話す。

ただ、その話がそのまま本当だと、俺は光魔法が使えると言う事らしい。なんてこった。

俺に出来るものがあるとは。

「そうですね。きっとロスさんは魔力のほぼ全てが光魔法に向いているとても稀な存在、そう言う事になりますね。精鋭部隊にも光魔法が使える人は5人もいないんですよ？それに全員腕輪装備状態でもランク9止まりです。」

俺はとにかく今の自分の状態が信じられなかった。

いきなりあなたはランク10の光魔法が使えますといわれても、今まで光魔法なんて使った事も無いこの俺が。

しかも偶然かは知らないがしっかり呪文は使えてしまった。

これは夢か？

夢ならもう覚めてくれ。目覚まし時計よ、全力で鳴り響け。速攻でお前のボタンを押して止めてやるぞ。

「それと…あなた方二人にも特殊な力があるようですね。レイさんは魔力の自己回復能力、どれだけ魔法を連発してもあなたは疲れを感じませんよね？」

このいきなりの発言にレイはまた首を傾けて

「え？魔法って使うと疲れるものなんですか？」

…おいおい…こいつ本気か？

俺はランク1の魔法の不発弾でも10回使えば100mを全力で走った以上に疲れるぞ。

ヘルだって30回くらい魔法を使った後は休んでいる。そういえばレイが魔法を使って休むの見た事無いつけ。

「次にヘルさん。あなたは魔法によるダメージを普通の人よりも多く受けません。体に抵抗力があるようですね。ランク4ぐらいまでなら傷を負わないでしょう。」

こいつは不死身人間ってか？

冗談か？

「じゃあ王女様を信じて、何かランク4魔法をやってくれませんか？それでどれだけのダメージがあるか。」

ありえない。

俺たちはランク2くらいの魔法でも結構痛いぞ。

確かにこいつはハンサムフェイスで痛がっているような顔は見た事

無いが、痛いものは痛い。
ましてやランク4なんか：

「わかりました。じゃあ行きますよ。」

って、あなたもやる気ですか：

「ミールファイア！」

…本当にやりましたよ。この人。

ミールファイア。ランク4の炎魔法。

キャンプファイアーで使うくらいの火柱がヘルを包み込んでしまった。

だがその火柱の中の人影は手を火柱から出すとそのまま手を横に炎を掴むようにして振り切ったのこのこと出てきやがった。

やっぱありえない。

少しこのハンサムフェイスが憎らしく見えてきた。その顔に傷一つ無い。

「本当に痛いとは感じませんね。生暖かいのは感じましたが。手は抜いてませんよね？」

「はい。全力です。腕輪のサポート能力を含め。」

この二人はおかしいようで。

疲れない機械少女と不死身ハンサム人間が俺の横にいます。

ヘルはこっちを見て気味の悪く見えるスマイルを見せて歩み寄ってきた。

なんとなく一歩引いてしまった。

「俺もレイもちょっと人より能力があるみたいだね。ロスだって光魔法使えるし。」

ちよつとじゃないさ。

お前は不死身。

レイは機械人。

未来のロボット顔負けだ。

俺は普通の光魔法が：まあ結構使えるだけだが、お前らは人間離れしてる。

「やっぱりあなた方は凄い人でしたね。初めて出会ったときにすこし違う魔力を感じましたから。さて：それでは本題に入ります。少し長くなるかもしれませんが王座までご案内しますね。」

王座までは王女の魔法で一瞬だった。

少し話の展開が早くて俺には理解する時間すら無い。

俺は光魔法が使える。しかもランク10まで。

レイは魔法を連発しても疲れない。更に魔法の知識は高く、魔力が增強されているこの空間ではかなり強い味方であろう。

そしてヘル。王女のランク4の炎魔法で無傷。生暖かいとか言いやがった。しかも美形。魔法もほどよく使える。

王座に座った王女は小物入れのような可愛いケースを三つ用意して俺たちの前に置いた。

「これはあなた方に合わせた腕輪です。ロスさんのは白、レイさんが虹色、ヘルさんのが黄色です。」

その腕輪は金で装飾された高級感のある物だった。
俺なんかにはもったいないくらいに。

「白は光魔法の威力増幅と闇魔法のダメージ軽減、虹色は全魔法威力増強、黄色が防御能力増強です。」

なるほど。確かに全員に合わせた腕輪のようですが、それをなんでわざわざ精鋭部隊でも無い俺たちに？

「じゃあ本題です。敵は確実にここを攻めて来るでしょう。そこであなた達に力を貸して欲しいのです。精鋭部隊といえど人間。疲れはたまります。そこを一斉に攻められてしまつては防ぐ事すら出来ません。それで…」

「もっちゃん良いに決まつてるじゃないですかあゝ！私の魔法が役に立つのであるならばうっね！」

王女の話も聞かずにテンション高めで叫んだレイは俺とヘルの首を掴んで立ち上がった。

こういうのがレイらしいのか。もう少し王女を見習え。御淑やかさおしとを覚えろ。

「ふふっ…そう言ってくれと助かります。」

結局俺たち三人はこの避難所の護衛役となったわけだ。
だが初仕事は休む暇も無くやって来た。

5..転送

結局、俺を含め3人はそこらへんの人間より特殊な能力があるそう
だ。

なんかのRPGの主役か、俺たちは。

「この腕輪綺麗だよね♪私にピッタリ！」

それはどうだか。

でも確かにこの腕輪は何か普通じゃない感じがした。
身に着けたときからどうも体の中を暖かいものが流れているような
感覚がある。

俺の中で魔力が増幅でもしているんだろうか。
学校で先生に見せてあげたいね。俺の光魔法。

「それはそうと、お前光魔法の魔術書なんてそれしか持っていない
だろ？俺のでも持っとけ。ランク4までだけどな」

ヘルは光の魔道書を俺に渡してきた。
この不死身ハンサムが俺たちの盾となってくれる事でも期待しよう
か。

「ええーヘルからロスにはプレゼントがあるのに私には無いの？
ちようだい♪」

この娘は一回王女に礼儀作法を教えてもらってくれ。

「……」

黙りきったヘルだがその理由はレイに呆れたわけでも無かったようだ。

上空にあった太陽光が一切無くなってそこには真っ黒な武装軍隊が一瞬にして現れた。

しかも今度は魔物では無く人に見える。

ふと足元が揺れたかと思うと俺たちは一瞬でドーム状の建物の中にいた。

恐らくこの避難所にいる人間全員が入っているんじゃないだろうか？とても大きくゆとりもある。

こんな事が出来るのは彼女だけだろう。

「皆さん。私です。エリルです。今現在この避難地区全域に突如謎の軍団が現れました。今精鋭部隊全軍で迎撃中です。皆さんはそこでおとなしく…」

そこまでで放送は終わってしまった。

その直後。

ドームが一瞬で消えてしまった。

砂場の城が崩れるかのように一瞬で。

「……………」

三人全員が啞然とした。

上空にいた武装軍隊は一切残っていないく、元通りの空。

付近も荒れた様子も無くさっきまでの世界。避難地区そのもの。

そして目の前にいるのは10歳くらいの少女。

「どうしたのかな？ お嬢ちゃん？」

レイは全く平然と少女に笑みを見せている。
だがその少女は無表情のまま指を上空に指し

「あなた達は元の世界に帰りたい？ 私はこれをお届けに来ただけ。
これを渡せば私の役目は終わる。三人の能力者によろしく。以上」

What? 何だって？

そんな事を思っていると上空から白い球体が降って来てレイの手の
中に納まった。

そしてそれはすぐに魔道書に形を変えた。

今までに見た事も無い魔道書だ。

そしてその魔道書から少女の方へ目をやると少女はもういなかった。
何だったんだ？

三人の能力者によろしく？

一体誰が？

すると俺たちの前にまたしても王女がワープしてきた。

「またあなた方が一瞬でやってしまったんですか？」

この前同様驚きの表情だったが俺たちは今起こった事をそのまま話
して魔道書を見せた。

「∴これはアーガスが行方不明になった城への転送キーです。3人
までの」

またか∴アーガス。一体彼が何回絡んでくるんだ？

しかもそんな転送キーを俺たちに渡してどうする？

∴いやもう答えは明確かもしれない。

もしその少女が味方なら、この転送キーの先には事の元凶がいる。

そして三人と言うのは俺にレイ、ヘル。
つまり俺たちにその元凶を倒せ。
そう言いたいんだろう？

「きつとそういう事でしよう。しかしこれが罠である可能性も十分
ありますので一度こちら側で精密調査してから……」

「めんどくさいから行っちゃおっか？ 三人でさ」

俺とヘルの腕を掴んでまた無責任な事を言い出したのはもちろんレイだ。

「確かにのんびりしてられる状況ではないな」

ヘルもハンサムスマイルで同意しやがった。おいおい…待ってくれ…。

「大丈夫だって！ だってロスもヘルもいるんだもん！ もし罠でもすぐ解決できるよ！」

その言葉は嬉しいんだか嬉しくないんだか。

「そんなわけで私たち行きます！ 魔道書は持ってるし、転送は王女様、よろしくお願いしまーす！」

もうどうでもよくなってきた。

要するにもしこれが罠じゃなけりゃ、俺たちはそこで元の世界を改変しやがった悪玉を倒してこっちに帰ってくればいいんだろ？
って、帰りはどうするんでしょうかね？

「この転送キーには帰りの分も含まれていませんか？」

そういった俺の問いに王女は残念そうに

「片道……ですね」

「……」

レイもヘルも動きが止まった。

もしこれで帰れなくなったら俺たちは永遠にあっちの世界かよ。

それは断る。まだ俺だっけしたいことは山積みだ。

この前買ったゲームだってまだクリアしてないぞ。

「…きっと大丈夫！ ほら！ ボスを倒したら自動的に移動させてくれるやつだよ！ きっと！」

なんのRPGやシミュレーションゲームだ。

いや、その前にあの少女は何だったんだ？ どこから、どうやって来て、どうなった？

「…分からないです」

王女はまるで犬みたいにな垂れてしまった。

やっぱり王女とはいえ疲れるものは疲れるんだろう。

RPGならHP回復の薬が落ちているはずだ。

「…ああもう！ 私遠回りとか好きじゃないのっ！ よっし決めた！ 行こう！ 三人で！」

レイは何を決めたんだかガッツポーズをして俺とヘルの腕を再び掴

んだ。

俺たちに選択権は無いんでしょうか？

「王女様！ もうこのさいだからズバババッと転送しちゃってください！ 帰りはどうにかなるってロスが言ってますので！」

…は？ ちょっと待て。俺は一回もそんなこと言って無いぞ。

「…分かりました。あなた方には最初から何かしらの役目が備わっていたんでしょうね。これも運命でしょうか。あなた方の無事を祈ります」

納得しないで下さいよ。

この二人はなんでこういうときに気が合うんだろう？

こうなったら魔王でもなんでも出てきてしまえ！
出来る限り抵抗はしてやるさ。

「畏だった場合、後の事は任せます」

冷静に嫌な事を言うな、不死身ハンサム。

だが確かに俺にも何か理由の不確定的な自信が少しあった。

俺にはレイもヘルもいる。

悪の元凶が何だ。

そんな気持ちがあっすらと俺の心にはあった。

「…やっちゃってください。もう覚悟しました。俺は元の世界に帰りたいんです。だからその世界をこの手で救います」

自分らしかぬ台詞だったなと思いつつも、自棄^{やけ}な気持ちで俺はいた。

「それでは行きます。ウユイエノンニンサ！」

不可解な王女の魔法の声を聞いた後は周りの人たちの頑張れとかしつかりとかの応援の声が少し聞こえて何も聞こえなくなった。体がゆっくり降り降下しているのが分かる。

横にレイとヘルもいる。

どちらかは俺の手を握っている。

このままどれだけ時間が過ぎるのか考え出したところで地面の感触が背中に伝わってきた。

「ここは？」

俺は立ち上がってすぐ目の前に建物がある事に気づき、またその建物もどこかで見た事があった。

教科書に必ずといっていいほど載っている。

「これってあれだよね…？確か…」

レイが自分の頭をゆっくり撫でながら起き上がった。そしてヘルはゆっくり立ち上がり城を眺めた。

「アーガスが行方不明になった城だ」

6..偽装

城の入り口は何百年も使われて無いような雰囲気を出している。この城。アーガスが何百年も前に行方不明になり、調査が行なわれたが何も発見できなかった城。

教科書で取り扱われていたためある程度知識はある。

見た目からも分かるが3階建ての古風な城。

そんな城に転送された俺たちは何をすればいいのか分からなかった。がとりあえず中に入ろうとした。

「固……っ」

そりゃそうだ。

ドアは全く動かない。

錆付いているんだろうか。

「二人とも邪魔邪魔。どいてどいて〜！今からこのレイ様が華麗な魔法を披露して…」

「いいからやれ。」

こんなコンピを結成してる場合じゃないんだ。早くしてくれ。ヘルは城を見上げながらいつもどおりのハンサムスマイルだ。なんでこんな状況でそのスマイルがでるんだか。

「フィアストーム！」

…ああ…そういう…。

レイはドアを開けるんじゃないやなくて壊そうとした。

思いっきり。
腕輪もつけているレイの魔法は恐ろしい威力だった。
が。

「全く何も変わってないようだな。」

ヘルは冷静に言っているが驚く事にドアには傷一つ見当たらなかった。

レイが放った魔法はドアを確かに直撃していた。
それでも無傷のドア。

「ショ〜ックウ…。」

レイはうなだれていたが俺も口からは溜息しか出なかった。
前途多難。

それも最初から。

だがその時、頭にまたあの声が聞こえた。

俺にしか聞こえないらしいその声は俺たちに助言してくれる。
敵か味方かは定かじゃないが、今は出来る事も無いので頼るしかないな。

「ドアの鍵穴に光魔法を当ててください。それだけです。」

それだけです。

簡単そうに言いますが、あなたは誰ですか？

そんな問いかけも出来ないの俺は適当に光魔法を放ってみた。

「シャイン。」

俺にも魔法が使えるのが未だに感動だ。

今までの人生ではランク1も発動した事も無いんだからな。

そしてドアからカチャッと音がした。

いかにも 鍵が開きました 的な音だったな。

そしてドアを開けて中に進入した。…確かに城の中に入った。

そこには湖が一つ。

三階建て？ 階段なんか無い。

どこかの洞窟みたいだ。

「おいおい…どうなってるん…」

俺はやっぱりどうかしてしまったのか？

二人がいない。

さっき一緒に入ってきた二人が俺の横にいない。

そして入ってきたドアも無い。

「…。」

哑然。

俺は何かしたか？

ここはどこ？ Where？

つか私は誰？

…落ち着こうか。

そんな事していると湖が沸騰したかのようにボコボコ音を立てている。

そして湖から一人の人物が現れた。

レイ？

お前は何をやってるんですか？
かっこいい登場シーンでも見せたかったか？

俺が安心して近づいていくとレイはいつもの…いつもの？
何か違うような気がする。
目の前のレイは微笑んでいる。
だが何か違う。…冷たい。

「イクリプス。」

「うおっ！」

俺はいきなりの不意打ちに真横にすっ飛んだ。
目の前のレイが俺に襲い掛かってきた。
しかも放ったのは…闇魔法？
それも魔術書等はない。
手で空中に文字を描いているだけだ。

「おい！レイか？聞こえてるか？」

そんな風に叫ぶ俺だが心では分かっていた。
こいつはレイじゃない。
いつもの笑顔じゃない。
俺の知ってるレイじゃない。
腕輪も…ついてない。

そいつは魔法で自分の周りに幾つもの光を集めだした。

「デイベインアロー。」

冷徹に単調で言い放った魔法。

俺は逃げているだけだ。

これじゃ今までと変わらないじゃないか。

せっかく俺にも使える魔法があって相手は本物のレイじゃない。

なら怯まなくてもいいだろ。

やってやるさ。

俺は魔道書を取り出し叫んだ。

「ライトニングバースト！」

一面に光が満ち溢れた。

俺も驚くほどの力が出て行った。

腕輪の能力増幅は凄いものなんだな。

そんな感心をあらわしていた俺の前には偽者のレイの姿は無く先ほどまでの湖が広がっていた。

そしてその湖の世界もガラスが割れるように崩壊していき、砕け散った。

そこにあったのは本来の城の内部と思われる構造。

そして横にいる二人。

「あ！目が覚めた！」

ヘルがいきなりそんな事を叫ぶもんだから俺もあせった。

目が覚めた？俺寝てたのか？

「馬鹿 ああゝっ！」

そういいながら俺の視界から消えて俺の方に飛びついてきたレイは涙ぐんでいた。

距離が近い。ってか無い。

「なんで城に入った瞬間に倒れこむのよ！心配するでしょ！もう20分くらい寝込んでたわよ！…ああ…もうっ！」

俺はそんな事になってたんですか。

いや、こっちはこっちでやばかったんだがな。
とにかくこの城は何かまずい。

先ほどの惨事を二人に話した。

「ほえ…私強かった？」

ええそりやもう。

偽者とはいえ俺が魔法使えないままだったらやられてたね。
今ここにいないだろう。

「…で、お前だけがそんな事になった。お前やっぱり何かあるんじゃないの？」

ヘルは考えるような仕草をしていたが実際どうなんだ？

俺には何があるっていうんだ？

光魔法以外はぜんぜん使えないのに。

…でも俺だけに聞こえる声はあるし、その声が今まで助けになっている事は間違いない。

「…まあいいとしてさ…これからどうする？」

結局城の中でやる事といってもまずは調査しかないだろう。調査なんて言えないただの見回り程度だろうが。

城の内装はさっきまでの湖とはかけ離れて古風な城そのもの。

壁に飾られてる絵は割れていたり、蜘蛛の巣がはられていたり和不気味だが。

この城は世界の保護対象物となっているため人の立ち入りは禁止。

まあ、こんなところ観光名所にしようたって周り是不気味な草原と川。

来たいという気持ちが湧くのはどこかの熱心な研究科やマニアだろう。

見回りながらそんな事を考えていた俺だが、レイは何かを見つけたようでこっちに手を振っている。

「本っ！」

見りゃ分かる。

しかし相当古い本のようにだ。

それに魔道書らしくは無い。

普通の本。

しかしいざページを開くと意味不明な文字列が並んでいるだけだった。

どこの国の言葉だよ。

するとレイは魔道書を取り出しなにやら呪文を呟きだした。

そして数秒間沈黙していた俺とヘルだが、レイの詠唱が終わったときには緊張感も緩んでしまっていた。

どれだけの時間待っていたんだろう。

その時間の間ずっと魔法を詠唱していたレイもその本人特有の特殊能力のおかげで疲れてはいないようだ。

普通だったら今頃立てないくらいまで疲労してしまうさ。

「力を求めるもの、しかし儂くも散り行く姿、幾度も見た。あなた、これ求める故、耐え抜く自らの肉体と、遙か天空まで響く光の声。」

「……。」

なんですって？

むりやり翻訳しました的なその文章を読み終えたレイは頭の後ろに手をやりながら、俺のほうを餌を待つ犬のような目で見てきた。俺は餌は持っていない。

「つまり、ヒント…なんだよな？」

「…多分…。」

結局具体的なことはつかめなかったがここには何かがあるんだろう。

「そーいや…ここの地下って本当に無いのかな？アーガスは行ったんでしょ？」

レイは脱力感丸出しの声で言っていたが俺もそこは気になっていた。

地下ねえ…地面掘り起こしてやろうか？

結局城を全て周って元の位置まで来てしまった。

変わったことといえば俺が偽者レイと戦った事ぐらい。

「…ん…。」

俺は自分で驚いた。

また頭の中で声が響いている。

「そこの下へ…。」

途絶えた。

そこの下？

つまりこの床下だよな？

…地面…掘り起こします？

「地下に行くには地面掘り起こすか？」

俺が言うどヘルは頭を抱えてやれやれといった面持ち。

「掘り起こすんじゃないくて壊す方が早い。」

「…そうかい。」

にんまりしているレイに破壊行為は任せておくか。

「ブレイクっ！」

地面に一メートルくらいの穴が開いた。

派手な破壊音等はなく、静かに穴が開いただけ。

そしてあった。

俺たちが行くべき場所だと思われる場所。

地下だ。

7..獣

その地下はここからだとかく暗くて全体は見渡せない。

「えーっと…ライト。」

光を出せる初歩魔法。

これも光魔法の一種なので俺にも使えるようだ。

授業でやってくれたら俺もこの才能をすぐに発見できたんだろうに。

照らされた地下は壁がレンガ。

それぐらいしか説明の仕様がなくらい何も無い一室だった。

ここにいても仕方ないので俺たちは降りてみる事にした。

「とはいえこのまま降りたら痛いぞ。特にお前たちは」

ヘルはのんびり穴の方まで進んで行き下を見下ろした。

確かに地面まで3mちょっとはあるな。

ヘルは頑丈だからいいが、レイなんかべたんと落っこちそうだ。

「…何よ…。」

俺がそんな事を考えながらレイを見ているとそんな思いが伝わったのかむすつとしたレイは穴まで歩み寄って。

「いいもん。私にはこの子がいるもん。えい！」

そうやって出てきたレイの召喚獣。スライムだ。

柔らかそうな体だからクッションにはなる…よな？

この前サーフボードっば変形してたときはしっかりした強度があったが。

で、そのスライムを地面に置いてクッション代わりですか？

「頭悪いなあ。そんなんじゃこの子が可愛そうじゃん。」

そういつて思いっきり抱きしめられてるスライムが妙に苛立たしい。傍線一本の目と顔も今回ばかりは嫌味っぽく見える

。

「スライムを滑り台みたいにした方が良いんじゃない？」

ヘルは俺を哀れむように言ってきやがった。

何か最近こいつも嫌味キャラなのか？おい。

「その通り〜！さすがヘル！誰かとは大違い〜。」

分かったから早くしようぜ。

トリオ漫才なんかしてる場合じゃないしする気も無い。

「はいはい〜分かりました〜っ。じゃよろしくね。」

そう言ってスライムを穴の前に置くとスライムは壺から出て

きた蛇のようににょろにょろ伸びていった。

こいつ凄い伸縮性あるのな。

「はい。それじゃあ滑りましょ〜う！そおれっ！」

勢いよくレイは滑っていったが地下には何があるか分からないって恐怖心は無いのかね。

こういう時レイみたいな性格って楽だろうね。まったく。

レイに続いて俺とヘルも滑り終えるとスライムはまたによりよろと縮んで元の形状になり、レイの所へ戻っていくとポンっと消えてしまった。

召喚獣は役目を終えるところな風に消えてしまう。

「お疲れ様〜。」

スライムが消えたほうへ手を振っているレイ。そしてその後ろにはこの個室唯一のドアがあった。

「いかにも怪しげなドアだな、おい。」

「…そこしかないんだ。行くしかないだろ。」

「い・い・か・ら！行くんでしょ！ほら〜私がいるんだから大丈夫！レッツゴー！」

どこから来るんだ、その自信は。

レイはドアのドアノブに手をかけるのではなく、思いっきり風魔法でドアを吹き飛ばしてしまった。

「もう床…今で言う天井だけど、ぶっ壊しちゃったんだから

どれだけ壊しても変わらないわよっ！触ったら麻痺するとかそんなくだらない仕組みがあるかもしれないんだし、触らなければ無害よ

っ！」

なんか最近レイぶっ壊れてるよな…；
前までもう少し大人しかった様な…。

「その方が安全かもしれないな。下手に触ってやられてしまっても
つまらないオチだし。ただ魔法に反応するトラップが無いとも言え
ないから注意しろよ。」

ヘルも段々おかしくなってきたよな。

俺は…：自覚は無い。

「だけど…ここ…絶対危ないよ…。」

レイがドアを吹っ飛ばした後動いていなかったがその先の光

景は凄まじい物だった。

またさっきまでの個室。

ドアもさっきまでと同じで一つ。

でもさっきの部屋と違う箇所が一つ。

馬鹿みたいにでかい怪物。

天井まで届いてる大きさの獣。

何に置き換えて示せて言っても今までに見た事の無い珍獣だ。

頭は…何かというど犬だな。全く可愛くないが。

胴体は…20倍の大きさの虎、腕は…キャノン砲みたいなのと蟹^{かに}み
たいなハサミ。

足はウサギみたいな感じ。

としか言い表せない。

腕だけ生物学的におかしいぞ。

そんな事を思っているとそのキャノン砲をこっちに向けて見事にチャージしようとしてる音がキュインキュイン鳴っている。

「危ないっ!!」

咄嗟にレイに飛びついていた俺の反射神経は自己ベストだとは思いますが今はそれどころじゃない。

レイがいた場所には3m四方くらいの穴が壁にぽっかり開いていた。ヘルは頑丈だから良いだろう。

案の定こいつは床に伏せて攻撃をかわしていた。

俺はレイに覆いかぶさっていたのに気付いてすぐさま横に転がったが、レイはなんとなくくらくらしてるように見えた。

「…もおおっ怒った!ロス!ヘル!こいつ倒そうっ!!」

元からその気だ。

「スプレッド!!」

レイの魔法は見事に相手にヒットした。

確かにヒットした。

その水魔法の威力は確実に上位ランク魔法に匹敵する。

使用者も腕輪装備のレイだ。

だがその化け物はその水を蟹のハサミのようなもので一払いするだけで完全に消し去ってしまった。

「ファイアブレード!」

ヘルの魔法もその図体に似合わない速度でかわされてしまった。
明らかにその身のこなしはウサギより早い。

この二人の魔法も効かないのなら俺がやるしか無いのか…。

「ライトニング！」

闇属性の魔物にとって光魔法は効果抜群だろう。

しかしこいつは常識はずれの強さの化け物のようだ。

一瞬で間合いを詰めて来たかと思うと光魔法に直撃しながらもこっちに突っ込んできた。

「…くっ…。」

即座にバリアを張っていたのでどうにかなったが一回の攻撃でバリアが割れてしまった。

光魔法も致命傷では無い様だ。

「…ドアまで走る！早く！」

…おい…。

レイは逃走モードでドアの場所まで行った。

だがドアは開かない。

「ストオームツ！！」

そして魔法でも壊れない

「なぁんでよお！！」

「こいつがこの部屋の鍵になってるんだろ。つまりこいつを倒さなければ次には進めない。そんなシナリオなんだろう。」

ヘルはバリアを張りながら俺たちを守っている。

そして化け物はキャノン砲乱れ撃ち。

そんなシナリオ頼んでないぞ。

こいつ…どうすりゃいいんだよ…。

「…頭…弱点は頭。」

またあの声だ。俺の頭に聞こえる声。

頭…？たしかに光魔法に直撃してきたときはハサミで顔を隠しながら突っ込んできたよな。

「頭だ！頭を狙え！」

レイはこくりと頷くとその化け物の頭めがけて思いっきり魔法を放った。

「ジャベリングサンダー！」

雷雲がその化け物の周りを囲むと雷がその化け物の頭めがけて一斉に放出した。

部屋に響いたその化け物の叫び声。

そして魔物は消えていった。

「…あれ…勝った？…勝ったよ！やったああ！！」

俺の方に飛びついてくるな。距離が近いぞ。

それにしても弱点を攻めれば一瞬だったな。

さすがにあれはボスじゃないな…多分。

そして次の部屋に行く為のドアから何か電子音が聞こえた。
きっと開錠の合図だろう。

分かりやすすぎる。

ヘルはにやけ顔でこっちを見ている。

何が可笑しいんだか。

「いや…二人ともさあ…こんな状況でそんな抱き合わなくても…。
さあ…。」

…あ。

そういえばレイはまだ俺にしがみ付いていた。

…って…そろそろ離れましようね。

嫌なんじゃないけど…ほら…あれ…不謹慎だ。

ちなみにヘルよ。抱き合ってるんじゃない。飛びつかれてるんだ。
それだけでも大分違うぞ。

「…え…あああああ！ちよつと！何でそんなにくつついてるのよ
！こらっ！」

こらっ！じゃないでしょうが。

レイは俺から離れると照れてるような怒っているような顔で髪をさら
らっとなびかせて咳払いをした。

「さあ！次に進もう！そうしようじゃないか！！！」

なんだかなあ…。

横で微笑んでるヘルが何となく憎たらしい。

ドアは魔法もいらず、目の前に立つと自動で開いた。
そしてその先にはさっきまでの化け物より信じられない光景が広がっていた。

次の部屋へのドアは無い。

つまり終点だ。

そこにあるのは牢獄。

その中にいるのは教科書でも有名な偉人だった。

何百年も前にこの城に調査に来て以来行方不明。

何百年も前だぞ？教科書は間違ってたのか？

そこにいる人物は紛れも無くその顔写真と同じ人物。

年も取ってない。

アーガスだった。

8..真黒の敵

確かに驚いた。

牢獄の中にいるのは俺たちが産まれた頃にはとっくに歴史上の人物となっていたアーガスだった。

それともただのそっくりさんか？

それにこの部屋には他の部屋に行くための扉も見当たらないし、ここが最終到達点。

…悪玉はあなたですかね？

「…やっと来たか…私の孫たちよ…。」

…喋った…。

ってか死んでると思ったぞおい。

…で孫だって？

年って嫌だね。

そんな風にしか考えられないような状況だったが、もちろん俺以外の二人だってびっくり仰天だよな。

レイは言葉を忘れたかのように立ち尽くしているし、こういうときに第一声を上げるヘルなんか石化したかのように動かない。

…ま、俺も呆然としたままだったけど。

「ここまで来たという事はわしの言葉はすっかりお主らの中の光魔法使用者に伝わったという事じゃな。あの娘も無事に届け物を渡せた。」

頭の中に響く声。あれはどうやらこの爺さんがやっていたようだ。

「まあよい。ここに呼んだのは他でもない。そっちの世界を襲った悪玉はここにいる。今は大人しくしているが、すぐにここに来るだろう。奴の餌はわしの魔力じゃからな。そのせいでわしはここでは魔法らしい魔法は使えないがな。」

「…話が読めないんですが。」

やっぱり第一声を発したヘルの意見に同意。
何が言いたいのかさっぱりだ。

「そもそもあなたは行方不明になってから何世紀か経ちます。それなのに生きているのは不自然でしょう？他にもたくさん疑問点があります。」

「聞きたい事は大体分かっている。なんでわしがここにいるのか、悪玉は誰か、なんでお主らを孫と呼んだか。簡単に言うとなんかいるこの牢獄内だけは時間が完全に止まっておる。だから腹もすかねば年も取らねば体も老化せぬ。これはわしがここに捕まったときに魔法で作りに出した空間じゃ。そして悪玉、それは…。」

突然言葉を詰まらせたかと思うといきなり血相を変えて

「ドアから離れるんじゃない！」

…反射的に体がドア付近から部屋の隅に動いた。
さっきまで自分たちがいた場所は黒い炎が上がっている。
そしてドアから見えるのは分かりやすく言うと「また」化け物だった。

だけどさっきの奴とは桁違いだ。

下から上まで完全に神話に出てくるような姿の竜。

体は真っ黒でその眼だけが赤黒く光っている。

…こいつが悪玉…って奴か？

「…立ち去れ…ここはお前らのような貧弱な生物がいるべき場所ではない。」

…喋ったぞ…。

「…これって…召喚獣なの…？」

レイは魔道書は開いているものの、立ち尽くしてしまっているような状態で、硬直していた。

「何だろうといい状況じゃないよな…さっきの奴よりは強そうだし。」

ヘル顔からもいつものスマイルは消えていた。

…いつもだったら俺だって硬直して震えてたんだろうな。
なんでなんだろう。

この時だけ自然と、躊躇うことなく魔法が発動できたのは。

「ライトニングバースト！」

光魔法ランク10。それに腕輪装備だから威力は最大限引き出せるはずだ。

その竜の周りの壁全てを吹き飛ばすくらいの威力はあった。
やった。

「リザクトリフレクション！」

そんな声が聞こえたかと思うと俺の目の前には黄色く輝く透明のバリアがアーガスによって張られた。

そしてそのバリアは黒い炎を防いでいた。

その炎の揺らめく隙間から見たものは黒く輝く体だった。

9..終幕

俺の光魔法を直撃させたにもかかわらず竜は傷一つないような状態でいた場所にそのまま立っている。

レイとヘルのほうにもアーガスが張ってくれたバリアは広がっていてそれぞれを守っていてくれた。

「虫けらが……そんなおもちゃのような魔法で倒せるとでも？　こんな雑魚ばかりなのに何故？　何故，あのように広い世界を支配できていたのだ？　自然に住む動物全ての頂点に君臨していたのがお前らヒトだったのだろうか？」

流暢りゅうちやうに話しやがって……。

でもランク10の魔法で効かないならどうすればいいんだよ。

「それならお前は何だ？　神か？」

ヘルのセリフが少しの沈黙を破った。

確かに，こいつは何なんだ？　少なくとも野生動物にしちゃ強すぎるだろ。

「私は確かに召喚獣だ。お前らが呼ぶ名ではな。だが私はその辺のペットのような奴らとは違う。ヒトごときにいいように使われ，そんな服従など私は認めん。なら，私自身の手でお前らなど世界から消し去ってやろうと思っただけだ。何が可笑しい？　当然の判断ではないか？　私はお前らよりも力，知能，全ての点において上回っている。：こんな説明をいちいちしてやっても無駄だろうな。すぐに：排除してやる！」

再び竜は口から炎を吐き出し、黒い炎が俺たちの目の前でバリアを破ろうと迫ってきた。

「あんなのどうやって倒すのよ……はあ。」

レイはバリアを連続で張り続けている。しかし攻撃には出られない。攻撃に出たところであいつには何一つ効かない。

「口の中じゃ。」

アーガスは指差した。

：おいおいおっさん。

なんのRPGだ？相手の竜の口が開いた瞬間にそこに魔法を打て。そういいたいんだろ？

生憎だけどそんな隙あいつには見えないし、そこまで近づけない。

「相手も生き物じゃ。炎を吐き続ける事は出来ない。呼吸をするときが少なからずある。その時に一気に近づいて魔法を唱えるのじゃ。」

「よおしっ！」

あんたは単純ですね。レイさん。

よおしっなんて言っても相手は未知の領域の化け物だぞ？

「平気平気！　だってロスがいるじゃん」

俺がいるから平気ってなんなんだよ。

「確かに。お前がいたら何となく死ぬ気しないよな」

どういう根拠があつて言ってるんだ、このニヤケスマイル野郎め。

なんていつでもやるしかないんだよな。……どうせさ。

「どうせだから一発で決めようぜ。早く帰りてえ」

炎が無くなった瞬間、つまり竜が一呼吸おいた瞬間に一気に間合いをつめ口へ魔法を放つ。

注意するのは近接戦だから爪とかで引掻かれないようにすることだな。

想像しただけでなんとなく痛い気がした。

いや、痛すぎるに決まってる。

「もう少し」

炎は小さくなってきていた。徐々に……徐々に炎がバリアから消えていき、遂に竜の姿がバリア越しにはつきり見えた。

「行くぞ！」

一斉に飛び出したとき俺はとにかく何も考えていなかった。

ただひたすら、竜の方へ走っていった。そして魔法を唱えた気がする。

とにかく、記憶が少し曖昧だ。

そんな記憶がしっかり戻ったのは竜の声を聞いたときだった。

竜の喚く声。地面が揺れているのが分かる。

目の前には崩れていく竜の姿。

そしてレイとヘルの姿。

……やった…か。

「なんかラスボス倒したって感じだな。」

俺たちはなんせ無傷。

常識じゃ考えられないくらい簡単にいつてしまった。

「おぬしらは強いのお。わしよりも……な。」

そういえば、なんでアーガスがここにいるのかまだ聞いてない。というより、死んでない事がまずおかしいが。

「わしは何百年も前、ここに召喚獣を探しに着たんじゃ。まだ誰も見た事の無い召喚獣。それはさっきの竜じゃった。わしはそいつを倒そうとしたんじゃが返り討ちにあってしまつての。しかもその竜はわしの魔力を自分の力にする為にこの牢獄にわしを閉じ込めたのじゃ。ここの牢獄はわしから奪った魔力を使って竜が時間の流れを完全に止めておる。つまりわしは年も取らなければ腹も空かぬ。そして奴がわしの魔力をほとんど奪い取ったとき、おぬしらの世界を奪い取ろうとして今回の事態に陥つたのじゃ。」

なんだか信じられないような話だな。でも…信じるしかないのか。

「このままだと人類は滅亡してしまう。そう思ったわしは魔力を全て使い果たしおぬしらにかけてみる事にした。年寄りの戯言じゃが、おぬしらはわしの孫のように見えての。そしてここまで導いたと言うわけじゃ。」

「それじゃあ元の世界は今どうなっているんですか？」

「心配ない。魔力の根元を断ったのじゃから全てが元に戻る。わしの牢獄もな。」

ってことは、アーガスは……。

「大丈夫じゃ。死などもうとくに怖くなくなったわ。むしろ死の先には何が待っているのか早く見たくてうずうずしておる。おぬしらには感謝せねばな。今までの日常までわしが送ってやろう。もう全てが元に戻っているはずじゃ。」

さようなら。それすら言う前に転送は始まった。

最後に見たアーガスの顔は笑っていたように見える。

「ストーム!」

……やっぱ駄目。

日常に戻ったけどやっぱり魔法は使えない。

いい加減ランク1くらい使えるようになろうぜ。俺。

「ロスったら。もういい加減ストームくらい使えるようになろうよ。私みたいに綺麗に華麗に美しく」

最後まで聞く気は無い。レイも元通りいつものレイだ。

この前の出来事が夢みたいだな。

「しっかしまあありゃなんだったのかね？　夢か？　でもロスも魔法使えてたし」

確かに今でも光魔法は使える。ヘルはいつにもまして不気味にも見えるスマイルを浮かべながら座っている。

「いいじゃんいいじゃん！　こうやって私もロスも、ヘルだって無事なんだからさ！　……ほおらもう学校行くぞっ！　はい！　学校まで競争！　よいドン！」

少しおしとやかになればいい子なんだけどな、あのじゃじゃ馬は。

俺は先を走っているレイに続くかのように走り出した。

「負けるかつ！」

またいつも通りの生活。

少しの間はそりゃちやほやされたけどさ。

王女にも感謝されたし、救世主なんて呼ばれたり。

自分でも感動するくらいあのときの俺たちは凄かった。はず

それでもやっぱり今までの生活が良いや。俺には。

魔法じゃ作れない平凡な日常が。

9..終幕（後書き）

長かったようで実際は短かったこの話ですが、どうにか完結出来ました。

……文字数的には過去最長の今作。

消化しきれてない所があるのが少しもったいなかったかも；

こんな魔法とかが使える日が来るのはもっともっと先の世界なのでしょうが、それでも一度は使ってみたいな〜。
それでは。

感想、指摘等ありましたらお願いします。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2896b/>

Narrative of sorcery～魔法世紀の物語～

2010年10月9日10時30分発行